

# 論説

バスタード・チャンネルは、テレビとウェブの交配プロジェクトで、テレビ・チャンネルの形をとったインターネット上のプラットフォームである。ネットワーク・アートのローテクさと経済性に主眼をおき、アジア、アメリカ、ヨーロッパにコラボレーターがいる。番組は世界中どこでも受信することが出来る。

2005年春には、12の番組が受信可能になる。参加者は、バーゼル、ベルリン、ジュネーブ、ロサンゼルス、メキシコ・シティー、パリ、ソウル、東京、チューリッヒからのアーティスト達だ。

このプロジェクトはテレビ番組のような構造なので、いつでも全ての番組を受信できるわけではない。予告編を見て、自分の国ではいつ次の番組が受信可能かを知ることが出来るようになっている。地上波のテレビ局が、時間や日付に関わらずいつでも番組をオンライン上で見られるように取り組んでいる一方で、バスタード・チャンネルはあえて制限をかけている。私たちは自分たちの番組がいつでも見られる、という状態を好まない。むしろ「チャンネルのザッピング」に警告を発するという態度をとりたい。

バスタード・チャンネルは、ウェブを、時間メディアとして提示することを意図している。これがテレビの騒々しい外見と、おずおずとした56Kモデムのレスポンスを掛け合わせたものなのだ。私たちのいくつかの番組は、フィルムのように上映されたり、猛烈なスピードでスクリーンを活気づけるものや、意図的に中断させて、誘惑されつつも欲求不満を同時に感じさせるよう作られたものもある。

また他には、データの流れをスクリーンへ運んだり、観客が何分でも何時間でも時間をつぶせるインタラクティブ性を提供しているものもあるのだ。

： バスタード・チャンネルには番組雑誌がある。映画、アート、メディア・サイエンティストの分野から国際的な執筆者たちがこの企画やそれぞれの番組に対してコメントしており、印刷して読むことができる形式を付け加えることによって、オンライン上のオーディオ・ビジュアル表現を豊かなものになっている。このテレビ雑誌はどの家庭でも印刷できるので、私たちは良いヴィジュアル・コンセプトをつくることに集中し、オンデマンド印刷は見た人にしてもらうことにしている。。

## 56kTVの全プログラム — バスタード・チャンネル

### ZZZZZapp. コマーシャル・ブレイク

初めて新しいテレビのチャンネルを調整する時、ホワイト・ノイズの映像と音声が、徐々に歪みがなくなっていき、きれいに番組が見れるようになる方向へと導いていく。ZZZZZappでは、日本人のアーティスト・グループexonemoが、このようなチャンネル走査の初期の段階をテーマにしている。JAVAによって開発された彼らのソフトウェアは、スパムメールからの広告イメージを使用して、デジタル画像データを音に変換する。東京のクラブでDJやVJをしている彼らは、炎症を起こした瞳や外耳炎のための、ひずんだパーティーを生み出している。ZZZZZappは日々変化していく、汚染された音楽と攻撃的な美に満ちた、終わらないコマーシャルである。

### Travelogue. トラベローグ インタラクティブ・ゲーム・フォーマット

今日のテレビ局は、更なる双方向性を求めて、視聴者からのゲームの参加者を招待したり、電話による視聴者の参加を行っている。モニカ・シュツデルとクリストフ・ヴァン・デン・バーグによるTravelogueは、誰でも参加することが出来る。このゲームでは、マス・メディア的に見られているというスリルは全く無いかわりに、仮の解答を保存出来るため、長期間ゲームを楽しむことが出来る。Travelogueでは、思考に埋没しつつクリックすることで、退屈なホテルの部屋から逃れてテレビという至福へと自身を投じることができる。そうすることによって、図像的な分類は混乱する。私たちが空間として経験し、またマウス上の指で映画的に動かしているものは3D絵画なのか、それとも写真なのか？もし、芸術が見え方や考え方を深めることを望むならば、Travelogueでも、聡明な答えに近づくためにはそうしなければならない。

### **Tv-Bot. 衝撃のニュース**

インターネットはニュース・メディアに侵入されつつある。インターネットは、ウェブ・カム画像や新聞記事、ラジオやテレビ番組などを同列に配信することができ、そこかしこに遍在するニュースや、遠くで起きているニュースは、世界のどこからでも、どの言語でも24時間引っぱってこれる。電子ネットやプログラムが存在して以来、私たちの言語はこのような電子的空間について隠喩的な言い換えしかできていない。マーク・リーのTVBotでは、彼がデータストリームを通してネットをスキャンし、図像化している。彼はプログラミング・コードによって、五大陸からの発信源を私たちの目と耳にさらし、それらを永久に自己再生する世界中からのニュース・イベントとして合成する。そうして56kTVバスタード・チャンネルには、更新されていく話題が絶え間なく提供されている。

### **AcidMissile. アシッドミサイル ガチャガチャザッピングされるアクション映画**

たいていのテレビ局はアクション映画を放映し、たいていのテレビ視聴者はチャンネルをザッピングする。パリのアーティスト、ジムバンクのアクション映画『アシッドミサイル』は、ニュースや娯楽番組のクリシェをサンプリングし、音やイメージを大胆に編集して、映像の持つ音楽性の美学を提示している。「コミック・エゴ」から「アスキーコード・ウォリアー」や軍刀を持ったフセインの銅像まで、グーグル検索されたウエスタン映画の俳優から自由に宇宙遊泳する宇宙飛行士まで、架空のテレビの夜のキャラクターたちが、4分間にわたってコンピューター上にちらつく。「アシッドミサイル」は映画の効果を生むためにhtmlとjavascriptの技術を使った、グラフィック・バンク・アニメだ。それは、ダンスを振付けるようにしっかりと構成された自動ザッピングであり、恐怖を伝え、繊細な操作システムを混乱に陥れるのである。

### **Sphinx. スフィンクス アドバイザープログラム**

バスタードの視聴者は、スフィンクスに心の事に関して質問し、数分後か、数時間後か、もしくは数日後にその回答を得ることが出来る。「スフィンクス」は、ブリジット・ケンプカーによる文学プロジェクトで、言語と人生の意味に関するものである。ここでは、全ての放送局が望んでいるような視聴者との相互関係が実現されている。つまり、私たちの視聴者は、テレビ上の神託とコンタクトを取り、個人的にアドバイスを得ているというわけだ。ただし、答えているのがスフィンクス自体なのか、コンピュータなのかということ、視聴者は知り得ない。なぜなら、そこでは二つの回答機能が作動するからである。一方には、人間の声を媒体としたスフィンクスからの答えが、他方には、しなやかな六行六連体で書かれ、異なった声によって読みあげられる機械によるアドバイスが用意されている。既にアジア、ヨーロッパ、アメリカの人々の多くがスフィンクスのアドバイスを求めている。スフィンクスの答えは、バスタード・チャンネルで読むことが出来る。

### **MILK. 成人向け**

アーティスト、シュウ・リー・チェンの作品は、アフリカでのエイズによる死者の数と、ネット上に広くばらまかれたポルノ画像を結びつける。プログラムコードは、MILKのページ上にこれらを取り込んでいく。ここではイメージが膨張し、支配的になっている。商業ポルノ写真が敷き詰められたカーベットのようだ。次々に映っては消えるセクシーなポーズの女性の体、安っぽい質感とカラフルな文字で書かれた「アクセスするにはここをクリック」という言葉。そこでは 短い映像が再生し、肥大してちらついた状態になり、イメージが飽和する、という永久に終わらない運動がくり返される。小さな画像はすぐに消し去られ、背景ではゆっくりと次のヌード画像が開かれる。その画像もはっきりと見えるのはほんの少しの間だけで、すぐに次の画像が重なってつぶされてしまう。ヌード画像が全て取り込まれて見られるようになるには30分もかかる。その間、トップページのカウンターは容赦なくエイズ死者の統計値を刻む。その数は、時間ごとに料金をとるポルノページの、時間をはかるカウンターの進み方とほとんど変わらないのだ。

### **Bastard The Series. ザ・シリーズ** テレビの小構想事典

ブローグ/ジーマンによる『ザ・シリーズ』には二つのリストがある。一つは104の形態で成されたテレビシリーズ、もう一方は56の動詞から成る。参加者は、片方のテレビのテーマのために、一つのリストから動きを指示することが出来る。例えば、「フラッシュ・ゴードン >誘惑する」「サブリーナ >恐れる」「悪女 >倒す」といった様に。これらは5824の可能な組み合わせからの3通りの例。それぞれの組み合わせが、ウェブの匿名アーカイブからのイメージ映像を順番に映し出す。動作イメージは、それぞれの被写体に続いている。それが二つの言葉映画の多様な持続時間結果である。いくつかのプログラムでは毎時間新しい画像を見れるが、他のものには「検索期間のため画像はありません・・・」と表示され、映像がすぐに終了するものもある。“TheSeries”は不条理な構想を生み出している。例えば、選択テーマを“サブリーナ”とすると、アメリカの面白くない青春コメディの小さい魔女だけでなく、個人としてのサブリーナとポルノのサブリーナも登場する。とにかく、動作言語が驚くような画像をもたらす。参加者が、この魅力的で活気ある画像を求めるため、『ザ・シリーズ』は、広くて同時に狭いイメージの視野や、ウェブ上に記憶されたイメージタイトルを描き出す。

### **View and Plan of Seoul. A Transpacific Intrigue.** 13編のスパイ小説

ソウルの芸術家グループ、Young-Hae Chang Heavy Industriesは、13編からなるホームドラマを56kTvのプログラムに提供している。リズムカルなジャズ音がバックに流れる脚色を、口頭で説明するためだ。それは、韓国人作員のレポートに関するもので、彼女はエル・グレコ事件と、トレド美術館の気取った学芸員を殺すという彼女の任務について話す。しかし、彼女は批判理論献身者として、グローバル化した世界の主な物と小事、男子トイレの落書き、もしくは東京とソウルのコンクリート建築の比較などを前面に保持することを嘲る様にさ迷う。“View and Plan of Soeul”は、文学と、音質と、表現豊かな印刷アニメーションで描くことを一体化している。

### **News from the Dead. 究極のメディアショー**

媒体とは何か？ジュネーブからのナタリー・ノヴァリナとマルセル・クルバリアンはこの疑問を「媒体は何者か？」という疑問に置き換えた秘伝のショーを公開する。インターネットのプロトコルは、形而上学の通信チャンネルになる。霊妙な将来から、死んだ中国人女性かと問いかける。放送チャンネルは、完全に開いてなく、声と顔は映像と音のフリッカーの中に隠れる。この茫然とした通信情報は私たちの純粋な意図に反すが、メディア技術の重要性によって永遠に立案可能な約束をする。低評価のやり方としての輪廻についてコメントしているアメリカの司会者のオフ声によって信頼が揺るがされる。

### **Crime Scene. 殺人現場のトロンブルイユ（だまし絵）** テレビに映る犯罪シーンの研究

アメリカでヒットしているテレビシリーズ「クライム・シーン・インヴェスティゲーション(CSI)」で使われている画像は、実際の殺人現場の写真に匹敵するものだ。彼らを作る「死体のある犯罪現場」の画像は、カリフォルニアの映画スタジオが持つ名人芸のような技術を証明している。彼らはアカデミックなだまし絵技法の近代の継承者である。また、彼らは自分たちが作った画像がいかに本物らしくできたかを、リヒター・スケール（震度計）になぞらえている。テレビの視聴者が青ざめ、ガタガタ震えるとき、彼らのだまし絵の効果が立証されるというわけだ。ロサンゼルスでCSIのスタジオ近くに住んでいる、写真家でメディア・アーティストのジョディ・ゼレンは、これらのテレビ画像の調査を始めた。彼女はそれらを集めて、恐ろしい写真のタブローを作った。それはマウスをクリックすれば並べ替えができるようになっていて、まるで調査型メモリー・ゲームのようだ。CSIシリーズとニュース放送から集められた文章の断片の配列により、テキスト／画像の配置は何層にも重なり、ハードな詩的モンターージュを構成する。

### **Crime Time. クライム・タイム** 犯罪映画のコラージュ

ベルリンのアーティスト、マルティン・ダールハウザーとドロテア・ヘインは昔のテレビのスリラー番組や犯罪映画から、ジャンルに特有のプロット・パターンとサスペンスの要素を取り出す。そしてそれらを、連続性が不明瞭で、結末もよくわからない画像のシークエンスに編集し直す。バックに流れる暗示的な音楽に抵抗するダールハウザーとヘインは、テレビシリーズから取った画像のシークエンスを切ったり重ねたりすることで、プロットに予型的な質を与えようとするのである。それゆえ、それらの画像は「クライム・タイム」の中では新しい役割を果たす自由を与えられている。視聴者は、画像のシークエンスの中にあてどない道を探すことを求められ、画像の中をさまようことになる。月のように満ちては欠けるサスペンスに接した観客は、ドラマの生成と偶然の相互作用に直面する。

### **Telenouvelle vague. テレヌーヴェル・ヴァーグ** メキシコのソープ・オペラ

ジャン・リュック・ゴダールは、ヌーヴェルヴァーグ期に非常にフランス的なアメリカン・スリラーを作った。現在彼は、メキシコの「テレノヴェラ」と呼ばれる悪名高いテレビフィクションのジャンルで称賛されている。しかし、第三世界のすべての地域で、主婦や飽くなきロマンティストたちの心をつかんできた偉大なテレビ画面を選択する代わりに、「テレヌーヴェル・ヴァーグ」はストーリーミング・メディアのDIY(Do It Yourself)的アプローチを選択し、ステレオタイプを避けている。

その中で焦点が当てられているオフ・ビートなトピックは、現在のメキシコ・シティに関係するもの。それはテクノロジーと自然がほとんど気づかれないうまにひっそりと戦い、ぶつかり合う場所である。

### **56KTV— インターフェイス**

「インターフェイス」とは56KTV—バスタード・チャンネルのハード・ウェアのことであり、それはモニターに接続されたレシーバーである。まず最初に、これをどう使うのかを知らなくてはいけない。新しいテレビ・セットを買って、箱から取り出した後するのと同じことをすればいいのである。しかし、バスタード・チャンネルの操作法は人目を引く。白黒二色のデザインのインターフェイスが、プロジェクトのローテクな性質を明らかにする。テレビ番組に直接つながる二つしかないスイッチ面は赤く塗られている。バスタードの番組は、視聴者がいつでも見たいときに見られるものではない。時間によって自動的に切り替わる番組表が提供することができるのは、一度に4-5本の番組のみ。テレポのチャンネルと同じようなものだが、インターネットのプロジェクトとしては新しいと同時に不便でもある。

5人のアーティストがインターフェイスに取り組んできた。マルティン・ウッドトリは、構造と美学の責任者、マーク・リーはタイム・スイッチのプログラミングを実現し、コンセプトチュアル・ファイン・チューニングのに開発に関与。モニカ・ストダーとクリストフ・ファン・デン・ベルグは基本のアイディアを発展させ、レインハルト・シュトルツは基本のプログラミングとインターフェイスのコンテンツのテキスト部分を手がけている。